報告要旨とディスカッション

「シンポジウムⅠ」マイノリティの人口学

報告要旨とコメント・ディスカッション

開催日時：1999年10月20日（水）13：20〜16：30
開催場所：清光会館　清光ホール

基調報告：石　　南國「マイノリティの人口学」

世界の人口は60億に達し，その大部分は途上国の急増部分によるものであります。経済発展に比して人口急増のため，戦後これらの地域では人口抑制政策をとってきました。一方，先進国は出生力減退が進み，出生促進政策をとらざるをえなくなってきております。

こういう状況のなかで，歴史的にはかなり古くから民族あるいは人種の移動からはじり，次第に異民族・異人種の相互接触（殖民地の拡大，戦争，特に戦後の冷戦・冷戦終結による民族紛争）は，プラスの効果よりはマイナスの効果ばかり顕現しているのが現状であります。今日，民族問題と宗教問題とが絡んで紛争は局地から世界へと拡散して，いまや世界の平和と安全を脅かしております。今日，屈指の複合民族国家でも，異民族・移人種の共生が混血化の過程を選び，同化の方向を辿るなかで，習俗・風俗の受容は必ずしも順調ではなく，階級差との葛藤から少数民族の問題を複雑に顕現化しているようです。これ以外の場合でも，先住民族の衰退化のなかで，そして自民族の意識・顕示と同化との葛藤のなかで複雑な問題を抱えております。

少数民族は，歴史的に少数民族化していった過程の違いによって1）先住少数民族，2）自律的少数民族，3）カースト的少数民族，4）移民的少数民族，5）政治的・宗教的難民としての少数民族に分けられるようです。少数民族の顕著な問題化は，とくに近代の国民国家の出現と民族主義の高揚のもと，少数民族が強大な民族の支配化に置かれるようになったことにはじまっているようです。その後，社会主義のもとで，多民族の結集で理想的な国家づくりを目指しました。しかし，これらの社会主義諸国家は，自由を求めて崩壊への道に入りました。と同時に，民族・宗教紛争へと走りました。これは，民族特有の文化・尊厳の抑圧から開放されたいという望みと意識の現れにほかなりません。現存する少数民族の諸問題について，国内エスニシティ問題を含めて，ここに設定したシンポジウムで人口学的分析・研究によるマイノリティの人口学論議を行うことを願います。

第1報告：三国　恵子

「在日韓国・朝鮮人の集住に関する研究—川崎南部地域を例として—」

ニューカマーを研究対象としたエスニックコミュニティの研究が，日本では最近盛んに行われているが，オールドカマーに関するものは資料的な制約があるためか少ない。本研究では韓国・朝鮮人一世が戦後，川崎南部地域に集まってきた事情と過程を地域の人々からの聞き取りと当時の新聞記事から分析する。韓国・朝鮮人二世，三世のこの地域への定住と他地域への分散の傾向についてもあわせて聞き取りを行った。

移民に関する先行研究によれば，移動者は定住場所を決定するにあたり，同胞集住地区を選ぶ傾向が強いという。同胞ネットワークの存在は移動の動因であり，移動が実行されるたびに同胞ネットワークは強固になり拡張され，さらなる移動を誘因する。また，ホスト社会への同化がすすむほど，同胞集住地域外への移動や分散型の定住がみられるが，エスニックコミュニティは将来も存在し続けるだろうといわれている。これらの指摘は在日韓国・朝鮮人の集住する川崎南部地域にもほぼあてはまる。

戦前の比較的早い時期から渡日した韓国・朝鮮人は多摩川の砂利採集や大企業の下請け，行商などに従事していた。川崎における砂利採取の労働者の8割は韓国・朝鮮人だったといわれている。京浜工業地帯が造成され，また神奈川県内各地で鉄道や道路工事がすすめられた時期に川崎や鶴見の飯場，鉄道工事現場などで多数の韓国・朝鮮人労働者が働いていた。軍需景気で川崎に多くの韓国・朝鮮人が流入してきたが，その数は川崎全市民の2割近くに及んでいたといわれている。その特徴は，出身地の偏りである。神奈川県住む韓国・朝鮮人は，1935年の時点で慶尚道の出身者が75%を占めていた。1985年の調査でも慶尚道出身者は73%を占めている。

徴用（強制連行）されてきた人々は，終戦後，最優先で帰国できたが，多くの韓国・朝鮮人がさまざまな事情で日本に残った。川崎にも炭鉱やダム・建設現場等の労働から開放された韓国・朝鮮人が，仕事や同胞のつながりを求めて再び集住し始めた。さまざまな差別に抗するため，集まって暮らすことを選んだのである。かくして戦前からの集住地地域であった池上町（旧桜本3丁目）や現在の桜本2丁目（旧中留），そしてセメント通りを中心とした浜町に韓国・朝鮮人が集結したのである。人々はくず鉄拾い，土木工事，ヤミ屋どぶろく造りなどで生活を支えたが，日本社会が次第に安定化するなかで，韓国・朝鮮人の就業はますます狭められていった。京浜工業地帯に隣接した地域は，ばい煙，騒音，排気ガスがあふれた未舗装のいりくんだ小路と密集した住宅地であり，川崎市の貧困地帯であると考えられてきた。日本人はいうにおよばず，韓国・朝鮮人の中でも多少の貯えができると，この地域から他地域へ移動していく考えが多かった。

臨時工や日雇い人夫等が多く居住するこの地域に，最近では韓国や東南アジアからの出稼者の流入が目立つが，出入りが頻繁で不法就労などの問題を抱えている。また，一度は他地域へ転出

したものの，この地域に再び転入する高齢の韓国・朝鮮人一世もいる。一世の多くは幼少期を祖国で過ごすため，生活様式を完全に日本風に変えることができず，日本人に囲まれて暮らすことに息苦しさを覚えるためである。この地域は在日韓国・朝鮮人のネットワークが発達し，韓国・朝鮮人にとって住みやすい地域であることに変わりはない。

1. 朝鮮から日本への移動
   1）植民地下の朝鮮の状況
   2）チェーンマイグレーション
2. 戦前の川崎市における在日韓国・朝鮮人の人口構造
   1）砂利採取，土木関係への集中
   2）川崎市南部地域への集住の始まり
   3）男子人口の優勢
3. 前後の川崎市における在日韓国・朝鮮人の人口構造，就業構造
   1）各地から大都市部への移動
   2）どぶろく，「土工」，鉄くず業から焼き肉や，遊技業経営へ
   3）他地域への転出
   4）女子人口の優勢

第2報告：阿部　卓

「中国の人口抑制政策と少数民族―雲南省ジノ族村落の人口変化―」

中国の人口の約9パーセントは，漢族とは異なった独自の文化を持つ55の少数民族によって構成されている。政府は少数民族に対しても，その人口規模にかかわらず，人口抑制を行ってきた。本研究の目的は，雲南省の少数民族の1村落において1994年から行っている現地調査によって得られたデータをもとに，村落人口が人口抑制とその他の歴史的背景により，どのように変化してきたかを明らかにするとともに，統計資料にあらわれてこない少数民族の直面にしている現実と問題点を報告することにある。

ジノ族は1979年に国務院によって少数民族として認定された中国の少数民族の中で最も新しい集団である。総人口は18,021人（1995年）で，中国の少数民族の中では，人口規模の小さい集団であり，その大部分が，雲南省南部の西双版納（シーサンパンナ）州，基諾（ジノ）山周辺の村落に集居している。ジノ語はシナ＝チベット語系，チベット＝ビルマ語族に分類され，ロロ（彝（イ））語，アカ語，ナシ語に近いグループに属する。ジノ族は民族固有の文字を持たないため，その歴史には不明な点が多く，北方から移住してきた集団で，移住当時は母系社会を形成していたと考えられている。現在の生業は焼畑による米・トウモロコシ栽培を中心とし，換金作物の栽培，狩猟採集，ブタ・水牛の飼

育も行っている。調査対象村落である洛特（ルトウ）一隊村は1966年に28世帯157人の移住者によって拓かれた開拓村であり，基諾族人民政府のおかれている町からは，徒歩で1時間半，トラクターで1時間程かかる。電気も水道もすでにひかれており，ジノ族の村落中，近代化の度合いはほぼ中程度にあたる。

1999年3月の時点の人口は54世帯232人であった。村落はマラリアの流行地域に位置するが，解放以降の医療の導入により子供の死亡率は確実に減少した。開村直後の人口増加率は3パーセント程度であったが，1972年には政府の人口抑制が開始され，女性の不妊手術の実施により，出産率は急激に減少した。現在では，ジノ族に対しては2人目までの子供の出産が許されており，女性は2人目の子供の出産後，しばらくして不妊手術を受けていた。

村が成立した直後の高い人口増加率は，その後の人口抑制政策の影響により低く抑えられてきた。村落の全面積は13.4 km^2 あり，中国の他の地域で見られるような食糧生産用の土地の極端な不足はみられず，換金作物用に土地が使われるようになった。しかし，婚姻に関しては，解放後の漢族との接触と人口抑制政策による変化がみられた。解放後，女性では近隣村や四川省への婚出がみられたが，男性の転出は少なく，村落内に結婚のできない男性が多く存在するようになった。また，出生率の減少もジノ族間の婚姻を困難にし，最近では，ジノ族の結婚相手が見つからない男性が，漢族地域へ結婚相手を探しに行く行動もみられるようになった。実際，近年漢族の嫁を迎えたケースが村落内で2つ続いた。村落内の子供の数が少なく，年金および保険のシステムも整っていないため，結婚のできない男性や子供のできない夫婦では，老後の不安を抱えながら生活しており，将来，深刻な問題となる可能性がある。独自の文化，歴史，地域の特殊な状況のなかで暮らす中国の少数民族に対して，政府の人口抑制政策は文化と生産活動の両面に影響を与えている。

第3報告：原　　剛

「ヨーロッパにおける人種差別理念の変遷とアボリジニ政策の変化」

中世ヨーロッパ文化では，ユダヤ人に対する人種差別があったが，それ以外には，人種的偏見による差別はなかった。

近代の大航海時代にヨーロッパ人は西半球や南半球に「野蛮人」と彼らが呼んだ人々を発見して優越感を抱いた。

啓蒙思想の進展の結果，人間の起源に関する聖書的解釈の権威が薄れ，人類はみな同胞で，平等であるとの観念も弱まった。

人間には起源を異にする優等な民族（ヨーロッパ人）とやや劣等な東洋人と劣等な野蛮人がいると，ヨーロッパ人は考え，ヨーロッパ人以外の人種を差別する意識が18世紀末から19世紀前半に生じた。

19世紀半ば頃に，社会進化論が優勢になると，ヨーロッパ人の優越感はますます強くなった。

しかし第二次世界大戦中のヒトラーによるユダヤ人抹殺計画とその実行が明らかになると，戦後のヨーロッパでは，人種差別政策を取る政府は次第になくなった。アボリジニに対するイギリス政府の政策は，初めは，彼らを英国民と同列の権利をもつ英国女王の人民であるとした。しかし19世紀半ばには，彼らを劣等な強化し難い部族として隔離し，ヨーロッパ人の血が汚されないようにした。彼らに対しては一般英国民に与えられる行政的福祉サービスも与えられなかった。

第二次世界大戦後に，彼らに対する差別的処遇は大幅に改善され，彼らが200年余前に利用していた土地の一部の所有権をも返還しつつある。

1. 序論：人種差別意識の起源と態様
2. ヨーロッパ文化における人種観の変化
   1) 中世ヨーロッパにおける人種的・宗教的理由による差別の被害者
      a) 宗教的・人種的理由による差別の被害者：ユダヤ人
      b) 宗教的理由による差別の被告者：ムスリム
      c) 中世ヨーロッパ人の人種的差別主義の一般的な欠如
   2) ヨーロッパ人の人種的優越感の出現＝ヨーロッパ人による「野蛮人」の発見
   3) 啓蒙思想の人種差別に対する影響の二面性：人間の平等論と合理主義による聖書の権威の低下
   4) 19世紀以降のヨーロッパ人の東洋観
   5) 社会進化論の影響
   6) 第二次世界大戦の影響
3. オーストラリアのアボリジニ
   1) アボリジニの起源
   2) アボリジニの経済，社会構成，土地利用
   3) アボリジニの人口
4. イギリス当局のアボリジニ対策の変化
   1) 「空き地」論の結果
   2) イギリス政府の人道主義と植民地の実情
   3) 19世紀後期の公然たるアボリジニ抑圧・差別政策
   4) 第二次世界大戦後の変化
      a) 白豪主義の放棄
      b) アボリジニへの補償

コメント・ディスカッション　石　　南國

問：ローマ時代以前に遡って，古代社会でもマイノリティの存在を始めとして差別が存在したと思われますが，差別がヨーロッパ文明のなかでどのようにして起こってきたのでしょうか。御三方は，それぞれの立場からマイノリティについて論じられたわけですが，その共通項を捉えるとしたら，それはどういうものでしょうか。

答：原先生

マイノリティに共通することは差別だろうと思います。ギリシャ時代に差別があったか，人種を基準にする差別はなかったようです。アリストテレスが人間を二種の種類に分けて差別する。それは奴隷と主人でありました。奴隷は身体的に奴隷の仕事にふさわしく生まれついたから奴隷であるという。主人は生まれつき高潔な人格をもっていて主人の仕事にふさわしいから主人なんだとする。生まれつきそうなっている。ただし，奴隷が主人にふさわしい魂や品位を欠いていることもあるとしながら，やはり奴隷は奴隷であり，主人は主人であるということは自然の定めであることについては一般の人々も否定しないであろうと書いている。かれは，人間の資質みたいなものを基準にして，人間を差別するけれども，なに人だから人間を差別するというようなことはしていない。これはやはり，たとえばアメリカの黒人に対する差別感とか，あるいはイエロペリル（黄禍）とかヨーロッパ人が言った黄色人に対する偏見とは違う。文明の高さからはあったかも知れないが，古代社会にあって文明の高さもあったろうと思うけれども，野蛮人という意識はあっても人種によって差別するということはしなかった。むしろ強い者，優れた者は他者を圧迫する資格があったと考えたようです。

答：阿部先生

本当は最初に議論しなければいけなかったのですが，マイノリティというものが本当に存在するものなのか，マイノリティというものが本当に存在するのか，マイノリティというのがすべて自他とも求める帰属意識，自分たちが民族だと思っていて，ほかの人たちもそういう民族だと思っているとき顕在化するし，その間に何かあると差別となるだろうし，利害関係があると差別が生まれるわけです。たとえば，漢民族もあれだけ言葉も，習慣も，文化も違う者が，みんな集まって漢民族だと思っているのは，かれらがそれが漢民族だとみんな思っているのが優位だし，決ってしまっていることで，外側からみれば，かれらは漢民族だと，もうレッテルを貼られているわけで，それに対してそうでない人たちが漢民族でないとレッテルを貼るわけですし，そういうレッテルを貼られたら，かれはもう自分たちがマイノリティだと考えるしかないわけです。だから，中国の場合だと政府が認定しているので，そこで議論する必要はないのですが，たとえば，在日とか，日本のマイノリティとかを取り上げたりするのも，本当はそこら辺の議論を詰めないと，

難しいところではないか，と感じます。

答：三国さん

マイノリティのことなんですが，マイノリティは数少ないことか，数が多いことか，それだけからではいえません。経済力があるか，その二つからは判断できません。それから政治的力があるかとうことでもありません。その3つ，ほかにもあるでしょうが，たまたま男性と女性の差別もそういったことも含めていろいろな形でマイノリティか，そうじゃないかということにもなるかと思います。ですからまずマイノリティは何かというと，力をもたない者ということだと思います。

問：フロアーから

A（意見）：非常に単純にいうと，やはり数が少ないとで，数は力なりというのがあるので，力が弱くとも，数が多いとこれは無視できない。逆に力が強くとも数が少ないとこれは敗北者になるというように，私の頭のなかでは数が非常に大きなウエイトを占めます。中華人民共和国は，約13億人と経済力，1人当たりGNPとか，それを軍事力，人民解放軍の士気，そういうものと比較していくと，そんなに高くはない。13億，それは無視できない。もしインドを加えると，20億人を越え，これは世界人口60億人の内の20億人ということになり，大変な数ですから，無視できません。しかし一つ一つ見つめると，そんなに単純なものではない。ですから，逆にいうと，数さえ増やせば，ある程度マイノリティの人々も発言力をかなりもつのではないかと思います。

やはり政治的見地からいうと，数は力で，たとえば，日本の選挙をみてもおわかりのように，こんな人がどうして当選するのか，あるいは，これでいいのかといえども，数さえあれば当選しますね。一方優秀な人が当選して欲しいと思ってもこれには及ばない。これはマイノリティになるのですね。だから，さきほど原先生が触れられたヒトラーによるユダヤ人抹殺ですが，当時のユダヤ人が13億人いたとしたら，これを全部殺すというのは不可能ですから，必ずしもああいう途を進まなかったのではないかと思います。

B（三国さんへ質問）：1980代以降の韓国からのニューカマーが，やはり川崎などの韓国集住地区を頼って集まっており，そしてオールドカマーが在日韓国人の比重を小さくしてきているが，その原因と人口動態の実態について所見をお願いします。

答：ニューカマーが結果的にこの集住地区に集まってくるのは，やはり同胞がやっている職場を頼ることになるからです。

人口動態に関しては，1985年以後国籍法の改正で混血児の国籍が22歳以後選択できるようになったからです。そのために子どもの減少となって現れているようです。

C（原先生へ質問）：アボリジニは，どこからきたのか。そして白人との混血は進んでいるのか，お教え下さい。

答：5万年前，東南アジアから来たようです。混血児は特別待遇で，アボリジニとは言わず，1930年ごろまでアボリジニを奥地に追いやっていました。

D（原先生へ質問）：アボリジニ人口は，長い間静止状態を保ったようですが，大きな理由はなんでしょうか。

答：母乳で育て，その授乳期間が長かったようです。

E（阿部先生の補足）：数は力だということはマジョリティの問題である。これは省みないわけで，われわれが考えることだけでも考えて上げていかなければならないと思います。

（文責：石）